
heretic

付和雷同

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

heretic

【Nコード】

N8323B

【作者名】

付和雷同

【あらすじ】

全ては学校からの帰り道友達のだいぢから受け取った飴を食べた事から始まった

graduation 1 最初の話

その時はつくづく真実から目を逸らしていたんだと今になってから後悔する。

前世の罰なんて、犯罪者が産まれたときから決まっているなんて、ましてや運命は変えられないものなんてそんな筈無いと思っていた。

違った

前世の罰も、生まれつきの犯罪者も、変えられない運命も全てが真実だった。

これはそんな事を全てが終わってから知った間抜けな俺の物語。

「これさ、裏のオババから義隆につてさ」

学校からの帰り道に片山代智が飴をこっちに投げて寄越した。

「何で？」

「知らん。オババが義隆に渡すように言ってきただけ」

受け取った飴を眺めてみるが別に変わった様子は無く、鮮やかな赤色をしている。まるで血のような……

オババから物を貰うと決まって不運に見舞われる事が多いように感じる。

小一の時に貰ったガムは学校で見つかり先生に叱られ、小五の時に貰った飴は喉に詰まって救急車で運ばれたし、それに中二の時に貰った蜜柑は食あたりで危うく死にかけた。

そんなことが以前に起こっていたので今回も警戒はするが、人の好意を無下にする事は出来ないので仕方なく受け取る。

俺は仕方なくその飴を口に放り込むと一抹の不安を胸に片山と共に家路についた。

俺は妙な胸騒ぎを覚えて目を覚ました。

時刻は午前二時を過ぎている。

窓の外を反射的に見ると学校の方向が少しだけ、目を凝らさなければ見落としてしまいそうだがほんの少しだけ明るい。

気が付くと俺は着替えもせず自転車に跨っていた。

理由は分からないが兎に角先に進むことしか今は頭に無い。

体が酸欠を訴えているがそんなことはオール無視。

やっと学校に着いた時には全身から汗が噴き出していた。

校門を潜ると人影が二つ見える。

一つは光る何かを放ちながらもう一人を追いかけて、もう一人はそれから逃れる様に走り続けていた。

「チヨロチヨロ逃げてつとマジで殺すぞ!!」

追いかけている方が叫ぶ。声からして男のようだ。

その声には殺意が籠もっているがそれ以上に気怠さが滲み出ている。その時逃げている方が俺の存在に気付き全力疾走でこちらに向かってきた。

先ほどまで遠くて顔が見えなかったがそれは少女だった。

“助けて”

そう言った様に聞こえた瞬間少女の体が一度大きく跳ね地面に倒れ込んだ。

「おやおや、餓鬼がこんな時間になんのようだ? つーか何でここにいの? そうかお前、こいつの仲間か」

男は一人で納得し、手を前に差し出す。

「消し炭になりな」

男の腕が青白く光、俺の体は宙を舞った。

痛い、雷に打たれたように全身が痛い。

生きているのが不思議になる様な痛みの中俺は声を聞いた。

お前は何故力を使わない？

力？そんなもん俺にはねーよ

それならば何故私を受け入れた？

受け入れた？何の事？お前は誰？

私はお前だ。

最後の台詞を聞き終わった瞬間俺力行使した。

やり方は解ったというより昔から知っている様な感覚。

声の主との同化。

敵の動きが、舞い散る木の葉の動きが、時間その物が止まる。

いや、止まるという表現は正しくない。俺が高速で動いているため周りの物が止まって見えているのだ。

俺は次の攻撃に移ろうとしている敵の横に近づき、蹴る。

ただそれだけ。

全てはその時に終わった。

男の横っ腹からに当てた蹴りは肉を潰し骨を砕き、それだけでは止まらず男の腹に風穴を開けた。

そこで俺の意識は途切れた。

g r a d a t i o n 1 最初の話

(後書き)

稚拙な文章ですが頑張ります。

夢を見た。

俺は知らない誰かと大きな石碑の前に立って何か呟いている。

隣にいる知らない人物の顔をよく見ようとすればするほどその輪郭は滲み、ぼやけ、崩れ出す。

そこで不意に後ろから声がする。

その声につられ、振り返るとそこにいたのは……

「おい、起きろ。朝だぞ」

片山の声がして眼が覚めた。

「え！？何で片山が此処に？」

「此処は俺ん家だ」

見渡すと確かに見覚えが無い物ばかりだ。

なにより俺の家には畳がある部屋なんて一つもない。

「まあ俺の家の感想は後で聞くとして何で義隆はグラウンドで倒れていたのかが気になる」

「説明したって絶対信じない」

「言いたくないならいいけどこっちは勝手に推測させて頂きます」

不意に腹が部屋中に響き渡る程の音を盛大にたて、その時になつてやっと俺は自分が腹を空かせていることに気が付いた。

「飯はまだかつてか？今すぐ用意してやるよ」

片山はそう言うなり立ち上がって襖をあけて出て行つた。

こればかりは素直に片山に感謝しなければならなかったが一つだけ解せないことがあった。

そう、何故片山がグラウンドに居たかだ。

俺は妙な胸騒ぎを覚えて学校へ行つたが片山も同じなのだろうか。それならばあの出来事も知っているだろう。

なら何故その事について触れない？

片山の家は学校からかなり離れているように記憶している。だからちよっと夜の散歩などという風には来れない筈だ。

やはり何か裏がある。

「持ってきてやったことに感謝せよ」

音もなくいつの間にかやって来ていた片山が飯を差し出していた。

精進料理……………

「片山っていつもこんなの食べてんの？」

「私生活にはあまり触れて欲しくないものがありますね」

片山はそういうと踵を返して歩き出し、氣付いた様に言った。

「俺、先に学校行ってるから」

「ちょ、俺の着替えは？制服は？」

玄関の戸が開く音がした。

結局俺は始業開始時間に間に合う事が出来たのだがそれはそれは地獄の登校だった。

まず何故か用意してあった制服に着替え、片山の家をでる。

片山の家は辺鄙な場所に立地しているためバスは一時間に一本在るかないか。

そのバスも運悪くバス停の前で発車してしまい乗り遅れた。

そしてそこから延々と学校まで走り続けて来たのだ。

「片山……………殺す」

俺は殺意を覚えながら席に着いた。

「よう、間に合ってよかったネ」

「片山、お前絶対語尾に つけただろ」

「バレちゃった？まあ気を落とさないで、今日はベタな展開に時季はずれの可愛い転校生が来るらしいから」

その時教室に先生と共に一人の生徒が入ってきた。

「まずは自己紹介から言って貰おうか」

坂本先生が見た目どおりの体育会系の声を教室に響き渡らせた直後
割とハスキーな声が響く。

「転校生の藤井蒼ですよろしく。最初に言っておきますが女じゃないです」

片山の予想陥落。

「青木の横は誰も居なかったな？」

坂本先生は分かり切っている事にわざわざ念を押すと俺の席の隣を指さした。

「青木ですよろしく」

形式通りの挨拶をすると片山の方に向き直ろうとした時藤井が耳元で囁いた。

「君が王の候補者ですか」

驚き、問いたただそうとした瞬間チャイムがなり、一時間目の授業の開始を告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8323b/>

heretic

2011年1月25日21時31分発行